

『随想録』より抜粋

48 一念の信 いちねん しん

今は昔、私が大正十三年八幡市の敬行寺に入寺して、翌年三月の彼岸に初めて自坊布教をした。新発意の布教と言うので続々参詣して下さったが、有難い事は言わず、深刻に実機に肉迫して行った。大部分は信仰が崩壊してしまった。この人達は私に因縁の深い同行だから、大満足の境地まで導かなければならないと自覚させられた。その後人々の帰依を得れば得る程、多方面からは異安心だ　　と烽火を挙げられた。私が異安心なら正常の安心を生命がけで宣伝すればよいのに、自分達は一句の法門も説き切らず、大酒飲んで騒ぎ立てているのだから世の中は面白い。

遂に衆僧の意見を纏めたのか管事一人の意見か知らないが、父の処に故障を申し込んで

た。父がその手紙を私に見せて、お前は信心を戴いた人を連判状に載せているかい。い

いえ、上から見て判りますものか。それなら何故こんな手紙が来たのだろう。それ

は本堂で遠方から参詣した人の住所姓名を日記帳に書いた事があるからそれかも知れません

。成程それを見ていたのだな、それなら信一念を説き過ぎると言っているが、一念が判

ると言つて教えるかい、判らぬと言つて教えるかい。判る人には判る、判らぬ人には判

らぬと教えます。それなら一念の時が判ると教えるかい。いいえ一念の味が判ると教

えます。時は判らないかい。一念の実時は仏智の早業だから分秒に掛からないし、

生命懸の時だから時計など見ていないから判らないが、苦悩の心が消除された後の満足さ

から仮時なら判ります。判らにや参れんかい。判らにや参れんかと言う正因ではな

く、参れる事が決まったら味が判り、味の判った人間なら仮時なら判ります。よしよく

判^{わか}った、返^{へん}事^じを出^だして置^おいてやろう。――一週^{いっしゅう}間^{かん}位の^{のち}後^{あやま}に謝^{てが}りの手^み紙^きが来^きた。

これを見^みよ。どんなに出^だされましたか――。それはね、(一) 信^{しん}心^{じん}を戴^{いた}だ^だ者^{もの}を連判^{れんぱん}状^{じょう}に書^かく

と言^いっているが、連判^{れんぱん}状^{じょう}を見^みたか。遠^{えん}方^{ぽう}の同^{どう}行^{ぎよう}の住^{じゅう}所^{しよ}姓^{せい}名^{めい}を日^に記^き帳^{ちやう}に書^かくのが何^な故^ぜ悪^{わる}い。

しんいちねん と す

れんし はちじゅうつう おふみ

かいあま

いちねん

(二) 信^{しん}一^{いつ}念^{ねん}を説^とき過^すぎるといっているが、蓮^{れん}師^しは八十^{はちじゅう}通^{つう}の御^ご文^{ぶん}に六十^{ろくじゅう}回^{かい}余^いりも一^{いつ}念^{ねん}く と

仰^{おお}せられてあるが、あれは説^とき過^すぎではないか。何^{なん}回^{かい}までは説^とき過^すぎでなく、何^{なん}回^{かい}以上^{いじょう}は説^と

き過^すぎか、その境^{さかい}を判^は明^{めい}言^いえ。私^{わたし}が見^みた处^{ところ}では新^{しん}発^{はつ}意^いの信^{しん}仰^{かう}に間^ま違^{ちが}い^がはないから、田^{いな}舎^{しか}の方^{かた}

で愚^ぐ図^ず愚^ぐ図^ず言^いわ^わず^ずに、本^{ほん}山^{ざん}の監^{かん}正^{せい}局^{きよく}に届^{とど}けて議^ぎ論^{ろん}せよ。解^{かい}決^{けつ}がつかなければ俺^{おれ}が行^ゆく。一^{いち}念^{ねん}

をはつきり説^とくのが何^な故^ぜ悪^{わる}い、新^{しん}発^{はつ}意^いが一^{いち}念^{ねん}の時^{とき}が判^{わか}ると一^ど度^どでも説^といたのを聞^きいた事^{こと}があ

るか。名^み号^{ごう}を諦^{たい}得^{とく}さされた一^{いち}念^{ねん}の信^{しん}の味^{あじ}が判^{わか}らなくて真^{しん}宗^{しゅう}と言^いえるか。成^{じょう}就^{じゅう}の文^{もん}には「聞^{もん}其^ご

名^み号^{ごう}信^{しん}心^{じん}歡^{かん}喜^ぎ乃^{ない}至^し一^{いち}念^{ねん}」と説^とかれ、「この一^{いち}念^{ねん}をもつては娑^{しゃ}婆^ばのおわり臨^{りん}終^{じゅう}とおもへ」

「これを知らざるをもって他門とし、これをしれるをもって真宗のしるしとす」と仰せられたのは時刻ではないぞ。味が無いのは撰取されていないのではないか。真宗にたのむ一念の味を説かなくて何を説くのだ、と手紙を出したのだ。――そうでしたか。と話した事があるが、聞即信の一念に八万の法蔵を読破さして戴くのだから、念を入れてお聞きなさいよ。

人々には我執が有る為に、自分の進んでいる程度以外は皆異安心と判断してしまふ癖があるから情けないが、真仏土巻に、

真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失す

と、又化身土巻に

然るに諸寺の釈門教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷うて邪正の道路を弁ふることなし

と、又御和讃には、

念仏成仏これ真宗

万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして

自然の浄土をえぞしらぬ

と仰せられてある。真仮が何やら知らずにいて布教されては、信前信後の区別も立たず、調熟と摂取とを初めから混乱していては、法門が混乱するのは当然だ。

一念の覚不を論ずる事は御裁断の御書に禁じてあるので時間に用事は無いが、一念の信の解決がつかなかったら、唯信独達の浄土真宗ではないのだ。

何時とはなしに信心を戴くと言う人も、一念の信が無くてよいと言うのではないのだ。

はっきりすると言う人も時刻が判ると言うのではないのだ。その人の立場でそれより他には考えられないのだから固執してはならない、皆本当なのだ。

(一)、七里和上にある方が、信心戴いたと言う事が判るものでしょうか、判らないものでしょうかと尋ねられた時、和上はそんな事に用事が有るものかい、唯不思議の仏智に摂取された事を慶べと言うお気持ちから、時刻の早業は判らないよ、何時風邪を引いたか判らないが、嚏が出たり鼻水が出て来るので、風邪を引いたなあお知らせするのだ。――それなら風邪ひき安心ですなとやった。すると頓智のよい和上だから、それならここに品物が有った、あらもう無くなった、泥棒に盗られたのだなと言うように判然判るかい。――それは判りますとも。――それなら泥棒安心だなあ、と言われたと。一念の話になると、百人が百人この話をされる。風邪引き安心とは何時とはなしにと言う方であり、泥棒安心は一念をはっきりと言う方に当たるのだが、人々は風邪引きと言う時には静かにしているが、泥棒安心と言う時にはどっと笑う。名前が悪いから笑うのであろうが、その中には自ずから、覚は誤りで不覚がよいのだと賛成した形になるのだ。して見ると覺を論ずる事も悪いが、不覺を論ずる事も悪い

のだ。真宗しんしゅうでは何時いつとはなしに信心しんじんを戴いたいたと言うい事ことは御聖教おしょうぎょうには無い事ことだ。何時いつとはなしは調熟ちようじゆくの光明こうみょうの分際ぶんざいであり、一念いちねんの解決かいけつが撰取不捨せんしゆふしやされた時の味あじである。若しも七里和上しちりわじょうが何時いつとはなしに往生おうじょうが決きまると仰おつしやったとすれば、仮令たと七里和上しちりわじょうでも法龍わたしは反对はんたいする。何故なぜかと言いえば御伝鈔ごでんしやうに

たちどころに他力撰生の旨趣たりきせつしやう ししゆを受得じゆとくし、あくまで凡夫直入ぼんぶじきにゆうの真心しんしんを決けてしましけり。と仰おほせられ、成就じやうじゆの文もんには

聞其もん名号ごみやう信心ごうしん歡喜かんぎ乃至ないし一念いちねん

が真宗しんしゅうの根本こんぽんであり、改邪鈔がいじゃしやうには

それについて三經ぎやうの安心あんじんあり。そのなかに大經だいぎやうをもつて真実しんじつとせらる。大經だいぎやうのなかには第十八の願がんをもつて本とす。十八の願がんにとりては、又願成就またがんじやうじゆをもつて至極しごくとす。信心しんじん歡喜かんぎ乃至ないし

一念いちねんをもつて他力たうりきの安心あんじんとおぼしめさるるゆえなり。この一念いちねんを他力たうりきより発得ほつとくしぬるのちは、生死しょうじの苦海くかいをうしろになして涅槃ねはんの彼岸ひがんにいたりぬる条じょう、勿論もちろんなり

と仰おおせられて、一念いちねんを抜きにしては真宗しんしゅうは成立せいりつしないのだ。信樂しんぎやう開発かいほつすれば一念いちねんに用事ようじがないのだと言いわるるかも知れないが、勿論もちろん開発かいほつすれば、書く事ことも話す事ことも語る事こともいらないのだ。信前しんぜんの者が信後しんごの真似まねして平氣へいきでいるから、一念いちねんの水際みずぎわを明らかに語かたらして戴いたくので、時間じかんに用事ようじはないが、開発かいほつの一念いちねんの味あじがなければ真宗しんしゅうの行者ぎやうじやとは言いえないのだ。

(二) 柿かきが熟柿じゅくしになるのは何時いつとはなしではないか。一時いちじに渋しぶが取れるものかい。信仰しんこうを戴いたくのも何時いつ開発かいほつしたと言いう事が判わかるものかい、と平氣へいきでいる人が大多数ひと だいたすうだが、それでは信前しんぜん信後しんごの水際みずぎわ、真仮しんけの分際ぶんざいは何処どこで立つのだ。熟柿じゅくしになるのは何時いつとはなしだが、眺ながめているだけでは自分じぶんの腹はらに入いらないぞ。喰くいついた時ときが一念いちねんの味あじではないか。お育てそだを蒙こうむるのは、何時いつとはなしに聞きかされて有難ありがたくなるが、総すべての望のぞみが尽つきて、真実しんじつの機きが照てらし出だされた

時ときでなければ、自力じりきの機執きしゅうは捨すたらないのだ、捨すたった時ときでなければ、攝取せつしゅされた一念いちねんは味あじわう事ことが出来できないのだ。何時いつとはなしとは誰だれが言いいだした言葉ことばだ。何時いつとはなしでは何時いつ決定けつじようするのだ。――自然じねんだから判わからない。判わからなくて安心あんしんが出来できるか。――「たちどころに他力たうりき摂生せつしょうの旨趣ししゆを受得じゆとくし」と言いわれ、「三世ごうしやういの業障いちじ一時つみきに罪消えて」と仰おおせらるるのは、何時いつとはなしに消きえると言いう事ことか。調熟ちやうじゆくの光明こうみやうと攝取せつしゅの光明こうみやうの、信前しんぜん信後しんごの区别くべつを知らしない人ひとの言いう言葉ことばではないか。

(三) 太陽たいやうが昇のぼるのは何時いつとはなしではないか。一度いちどに夜よが明あけるものか。信心しんじんも何時いつとはなしに疑うたがい晴はれるのだと言いっているが、太陽たいやうは何時いつとはなしに昇のぼるとして、太陽たいやうを名号みやうごうに譬たとえたのであろうが、それなら名号みやうごうは何時いつとはなしに正覚しょうかくを成就じやうじゆされるのか。初めはじから法ほうと喩たとえが合あわないではないか。名号みやうごうは十劫じゆの昔むかしに正覚しょうかくを成就じやうじゆしてあるのだから、太陽たいやうは既すでに中天ちゆうてんに輝かがやいているので、何時いつとはなしに昇のぼるのではないぞ。罪つみは法ほうになく、機きに有あるのだ。無明むみやうの酒さけ

に酔よいつぶれている処ところを知識ちしきに呼び起おこされて、未まだ早はやい、夜よるは明あけていないではないか、と強情張ごうじょうはった機きが、ぐずぐず言いっている時ときが調熟ちようじゆくの分際ぶんざいで、あらあらこんなに寝過ねぎしてゐるとは知しらなかったと氣きがついた時ときが一いち念ねんの信しんの時ときなのだ。

(四) 一俵いつびようを荷になうた男おとこが有あつてその俵たわらの底そこを鼠ねずみが噛かつていて、たらたら米こめが抜ぬけて落おちて何時いつとはなしに軽かるくなるように、信心しんじんも何時いつとはなしに罪つみや障さわりが取とれて安心あんしんの身みに成なるのだと言いっているが、暇ひまに任まかせて色々考いろいろうかんがえたものだ。誰だれの話はなしをしているのだ。各自かくじが荷にない切れない一俵ひようたわらを荷にうた程ほどに業障ごうしようの重おもさに驚おどろいて心配しんぱいした事ことがあるのかい。又また段々軽だんだんかるくなったなあひと、まだ少すこし残のこっている米俵こめたわらを荷になうているのかい。聖人様しょうにんさまは二十しゆぎ年の修行しゆぎも、百夜ひやくやの祈願きがんも総すべてが間まに合あわず、定水じようすいを凝こらしても真月しんげつを觀かんじようとしても、妄念もうねんより他ほかにないみと見限みかぎりがつき、投なげ出だした儘ままが摂取せつしゆされた心安こころやすさに大満足だいまんぞくされたのであつたが、何時いつとはなしと言いう事ことが聖人様しょうにんさまの上うへで言いえるか。聖人様しょうにんさまが出家得度しゆつけとくどから開発かいほつの境地きやうちまでは何時いつとはなしに育そだ

てられて来られたが、開発の一念は立ちどころであつたのだ。

道俗よ初めから信後の真似をしているから、真の求道がないのだ。真の求道が無いから疑雲が見えないのだ。疑雲が見えないから開発の天地が諦得出来ないのだ。出来ないから何時とはなしと言うより他に言いようがないのだ。溺れていた人が助けられた時、何時とはなしに助けられたと言えるか。停電で困り抜いていて、点電した時何時とはなしに点いたと言えるか。斥候に出て戦死したのだろう、十日にもなるが帰還しないからとの報で泣いている時「ブジキカンシタ」と来電した時、何時とはなしに安心したと言えるか。

後生が一度位一大事に成ったかい。死後の話ばかり聞いて、成って来いとは仰らないと罪惡を包む稽古ばかりして、死にさえすれば往生とやっている人に、一念の味が判るものかい。それで死後の往生を楽しむ者は何時とはなしの安心で満足し、平生業成を諦得したいと求める者は、一念がはつきりしなければ承知が出来ないのだ。その人の立場立場で説を立て

争あらそっているのだ。これも大海だいかいの妙波瀾みようはらんだから面白おもしろい。最後さいごにはそんな言葉ことばに用事ようじがなく、唯ただ

念仏ねんぶつするより他ほかに道みちがないのだ。